
とある傭兵と商人の顛末

旗手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある傭兵と商人の顛末

【NZコード】

N4340Y

【作者名】

旗手

【あらすじ】

マークス…男。26才。傭兵歴10年。

アンナ…女。20才。商人歴5年。魔術師歴4年。

一人の出身地…リイズ公国。小さな国。

一人の現在地…ブリガン王国。大きな国。

自由気ままに新天地を目指した傭兵マークスを待ちかまえていたのは、銃と魔術が混在し、そして相容れない、危険な地だった。

そんな地でたくましく生き、野望を胸にひた走る女商人、アンナ。

二人の出会いがもたらす運命は、一国の存亡をおも巻きこむ大きな渦となっていく。

傭兵、新天地に立つ

「見えたぞ！港街だ！」

航海が5日目を迎えた早朝。

乗組員の1人が叫んだ。

船酔いに悩まされ、船内で横になっていたマークスは、おぼつかない足どりで甲板に出た。ぼさぼさの金髪をかきながら、舳先の方を見やる。

しばらく眺めていると、水平線に陸地が現れた。さらに近づくと、陸の斜面に白い建物が並んでいるのがわかり、船着場も見えてきた。たくさんの白い帆が、朝やけの光を浴びて、淡く浮かびあがっている。

「本当だ！」

「間違いない！ 港街だ！」

「ついに”白の港”、”王国の美しき面”と謳われるハシタアル港についたんだな！」

ほかの乗組員たちも続々と甲板に上がってきた。マークスは彼らと肩を組み、歓声をあげた。

地獄のような船旅から開放される喜びと、新天地で待ち受ける未来への期待に、マークスは胸躍る気持ちだった。

船は着場へ近づいていく。

いく隻もの船とすれ違ううち、だんだんと港町特有の喧騒に飲まれていくのがわかる。潮と酒と体臭の入り混じったひどい臭いが鼻をつき、マークスはおもわず顔をしかめた。

船着場には多くの船が停留しており、たくさんの人々が入り乱れ、様々の言語が飛び交っていた。

船が桟橋に着くと、すぐに荷下ろしが始まった。

「おい！ その荷は丁重に運べ！ バカ野郎！」

フラついた足取りで木箱を運ぶ船員に、船長格の男が激を飛ばす。すんぐりした手脚をオーバーに動かして指示しているのは、赤ら顔で禿頭の男だ。

「バルハリク船長」

マークスがふらつく船員を手伝つてやりながら、船長格の男に声をかける。

「この木箱の中身はいったいなんなんだ？」

「秘密だ！ 買い手からの強い要望でな！ 開けたら殺す！」

マークスはこの木箱の中身が気になつていた。自分が護送を請け負うことになつていてる品だからだ。

買い手は内陸の商人で、これを取引相手に届けるまでの間、品物と商人の身の安全を確保するのが、この地ブリガン王国での、傭兵としての最初の仕事だつた。

マークスを商人に紹介するのは、いま目の前で怒鳴り散らしている船長のバルハリクだ。

二人は親子も同然の関係だつた。

マークスの故郷はリイズ公国という。

いまいるブリガン王国よりずっと小さいが、資源が豊富で力のある国だつた。

バルハリクの夫人が その内陸地域で孤児院を営んでおり、マークスは15までそこで育てられた。

まだ髪がふさふさだつた頃のバルハリクが、海から帰つてくるたび、少年のマークスに馬術、剣術、賭け事など、彼が男の嗜みと考えるものを教え込んだ。

もつとも、育つた環境のせいか、マークスはバルハリクの望むよう

な船乗りにはならなかつた。代わりに傭兵としての道を選んだのだった。

それでも、バルハリクは彼のことを気にかけ、こうして渡航の世話や仕事の斡旋までしてやつていた。

リイズ公国はいま国境地域で紛争が起きている。

マークスはギルドに所属する傭兵として軍役を課せられ、何ヶ月も拘束されるのを嫌い、リイズから逃げてきたのだった。

戦災で親をなくして孤児院で育ち、愛国心など欠片も持たない彼は、ここブリガン王国で新しい生活を始めることに決めたのだ。

（そのためには、今回の仕事を滞りなくこなさなくちゃな）

マークスは決意を新たにし、表情を引き締めた。

木箱は3ft四方のものが全部で4つ。それらが一台の荷車に載せられた。

船に積んできたなかで、今日中に取引が予定されているのはこの荷だけだつた。

バルハリクは船員たちに荷下ろしをサボらないよう釘を刺してから、取引場所である倉庫へこの荷を運ぶため、マークスに荷車を引かせ、自分は後ろからそれを押す。

「いくぞマークス」

「おう、おやつさん」

2人は人混みへ分け入つた。

港、美しきその面差し

ハシタアルの建物は石灰岩を利用した建築で、通りの両側に純白の列を成していた。その列からせり出して露店が並ぶ。活気付いた声が飛び交う中を行く人々は、容貌も身分も様々だった。シルクのレースをなびかせる浅黒い肌の麗人や、多くの従者を引き連れて胸を反らせて歩くブリガンの男爵、それをすゞすゞとよけて通るボロ服の船乗りたち。

マークスたちの荷車はそれらの雜踏の間をうまく縫うように進んでいた。

さすが”白の港”、”ブリガンの美しき面”とうたわれるだけあるなど、マークスは見回しながら思った。

ハシタアルはブリガン王国を代表する沿岸都市だ。外海から訪れる人や交易品を迎え入れ、この国の特産品である毛皮や羊毛、鉱石を輸出する。まさに顔の役割をなす都市だった。

だが、もともとハシタアルは、ずっと昔に外海から来た海賊たちが、ブリガン王国の領地を侵略するために築いた橋頭堡に起源をもつ。

この海賊たちの子孫は領土が取り返されてからも残り、それがブリガン王国における商人たち、彼らが運営する商会という組織の始まりになつたのだ。

バルハリクは、自分もそいつた者たちの子孫なのだとよくマークスに話していた。彼はブリガン王国の出身だった。この荷を売るこことなつている商人も、マークスと同じリイズの出身だが、商会に

属するから立派なブリガン商人の子孫なのだと、バルハリクは船上で話していた。

バルハリクは故郷や血縁からくるつながりにこだわる男だった。だからこそマークスのような、本来なら赤の他人である孤児に愛情を注げるのだろう。

マークス自身は親に捨てられたという気持ちが強く、こういう情はそれほど育たなかつたが、考え方自体は好きだつたし、バルハリクのことをおやつさんと呼んで慕つていた。

しかし、そういうだわりはときに困った事態をもたらすことがあるのだ。

船乗と銃兵と傭兵の関係（前書き）

貨幣

c o p p e r p e a c e (銅貨)

s i l v e r p e a c e (銀貨)

g o l d p e a c e (金貨)

価値

100 copper = 10 silver = 1 gold

でお送りします。

なにやら猪のそれのような荒い息づかいが聞こえ、マークスは振り返った。

荷車を押しているバルハリクが、胡乱な目つきで一点を睨んでいた。彼の視線の先には、三人組の兵士が歩いていた。見たところ銃兵のようだった。

鎧帽子の上に青い上衣を着ており、胸には紋章があしらわれていた。革紐のついた金属の筒をたすき掛けに背負つており、マークスはそれが銃という武器だと検討をついた。聞き知った通りの形状だったからだ。

「野蛮な科学院の下つ端ども……！ ハシタアルの、いやブリガンの美を穢すやつめり……！」

バルハリクは彼らを睨みつけたまま、ブツブツと罵りの言葉を吐いていた。

「よしなよ、おやつさん。いちいち突つかかってたら、命が幾つあっても足りないぜ」

銃兵は科学院という組織が運営する兵团だ。バルハリクは、彼ら科学院のせいで故郷が変えられてしまうと考えていた。

彼らは魔術に代わる技術として、科学という概念を提唱し、その普及を目的としている組織だ。たしかに彼らは、この国に革新的な変化をもたらしていた。

とくに革新的なのが、銃という兵器と火薬の開発だ。

火薬は、火の勢いを何倍にも膨張させる薬で、修行や訓練を受けなくとも、火の魔術より強力な爆発を生み出せる。科学院独自の技術で、その精製法は門外不出だった。

銃の威力に魅入られた都市の支配者たちは、科学院を積極的に領地へ招き入れた。科学院の本拠は王都ケストナーにあるが、ここ数年で、国中の都市に支部が設立されたらしい。

確かに、その伸長ぶりには門外漢のマークスも得体のしれない不気味さを感じていた。

そうこうしているうちに待ち合わせの場所についたらしく、バルハリクは我にかえって一棟の倉庫を指した。銃兵たちも横道に折れていなくなり、マークスはホッとした。

「大丈夫だ。いきなりぶん殴つたりするわけじゃねえんだから。まだそれくらいの分別はあるあ」

「まだつてのが気になるけどなあ……。しかしそれ、おやつさんの故郷に対する愛情は嫌いじゃないぜ。おかげで、俺はこっちでも仕事にありつける。感謝してるよ」

「都合のいいことばかり言いやがる。仕事の世話をしてもやんのは、おまえの傭兵としての腕を買つてるからさ。まあ、おまえは船乗りには向かんようだがな」

マークスも、自分には傭兵のほうが向いていると思っていた。なにしろ賃金の安い仕事が嫌いだった。

バルハリクのように自分の船を持つていればいざ知らず、普通は船乗りの仕事など大した稼ぎにはならない。一日舟で働いて、せいぜい 1 sp が賃金の相場だ。今回の船旅は 5 日だから 5 sp だ。仮に一ヶ月船の上で働いて、稼げるのは 30 sp。これでは一ヶ月の食費を賄うのがやつとの金額だ。船に住みこみで働くか、副業でも持たない限り、人並の暮らしは望めない。

その点、傭兵の仕事は内容も依頼主の素性も様々で、賃金の相場は複雑だが、さいわいこの国の傭兵ギルドは一日の最低賃金が 2 gp というのが法令で定められていた。それはリーズの傭兵ギルドと同程度の相場で、マーカスには十分満足できる金額だった。

女商人、アンナ

「どうやら、倉庫には相手より先についたようだつた。待つ間に、マークスは革の胸当てを着けて、腰に剣を差し、慣れた傭兵の格好に装いをなおした。

「おい、時間があるかもしれんから髪も切つてきたらどうだ?」「隣に立つていたバルハリクはマークスのボサボサの金髪を見上げて顔をしかめた。

「このあたりの床屋は高いのさ。ほかの船乗りから聞いた話だと、一回の散髪で400はとるんだよ。いま俺の全財産が500だし、あまり出費したくない」

「おいそりや、俺が船員の報酬として払つた額だろ?に! 向こうの仲間から送別にもらつたつていう100はどうしたんだ?」

「いや、あんまり舟が揺れるもんだから、つっかり海に落としちまつたんだよ。船旅のあいだじゅう、ずっと海が大しけだつたろう?」

「?

「何言つてやがる。どうせ船員たちとの博打遊びにつき込んだんだろ?、このろくでなしめ」

図星を突かれたマークスは頭を搔いた。

「おやつさんこそ、整えないでいいのかい。その頭は」

バルハリクはおもわず丸い禿頭を両手で押さえる。顔を赤くしてマークスをにらんだ。

彼が何か言おうと口を開きかけたとき、パカ、パカという蹄の音が近づいてきたので、一人は入口のほうを見た。

倉庫の入り口に獣が一頭現れた。馬にも似ているが、ロバのような長い耳をしている。一頭ならんで馬車を曳いていた。

「おお、アンナ!」

バルハリクが両手を広げてうれしそうに叫んだ。

二頭の獣が曳く馬車から降り立つたのは、一人の女だつた。

赤いローブですっぽりと身体を覆っていたが、後ろに束ねた黒髪と顔つきで性別がわかつた。

アンナと呼ばれたその女性は、油断なく光る緑の瞳でバルハリクを、次にマークスを見た。

そして、ふいに手を細めた。つかつかと歩み寄つてくる。マークスは思わず一、二歩後ずさつた。アンナは6フィート以上あるマークスの体躯をじろじろと上から下からねめまわす。ふんと鼻を鳴らした。

「こいつが俺の言つてたマークスつて男だ。見てくればなんだが、腕は確かだぜ。俺が保証する」

バルハリクが紹介した。

マークスは彼女のあからさまな態度にむつとした。

（この女、俺の値を下げにかかつてやがる）

商人によくある手口だつた。難癖をつけて雇う相手の評価を落として、自分の払う報酬額をすこしでも減らそうという魂胆なのだ。（冗談じゃない。最初の仕事から安売りしていたら、今後の儲けにも響くじゃないか）

マークスは軽く息を吸い込むと、胸のあたりにあるアンナの顔を見下ろしながら、

「よろしくたのんます。リイズ国で10年、傭兵稼業をやってました。内戦のときは前線部隊として参加したこともあります。そちらのゴロッキよりは役に立つてみせますよ」

声を張つて自己紹介してみせた。

「リイズ国だつて？」

ところが、アンナはまた鼻を鳴らした。

「あんな古い国の内紛なんて、どうせ前時代の戦だらう」「なー？」

交渉、成立

2人のやりとりに、思わずバルハリクの顔がくもる。

「おい、アンナ……」

「前時代ってのは、どうじり」とだ……？」

マーカスは眉をひくつかせながら聞いた。

「どういうことって、銃を使わない戦つてことや」

「たしかに、銃を使う戦に参加したことはない。だが、銃っていう武器のことなら、俺だって知ってる」

「知ってるだけで、じつさいに戦えるものかね」

見かねたバルハリクが割つて入つた。

「おいおいアンナ。銃の扱いにも慣れてなきゃダメだとしたら、雇う条件としては酷じやないか？ あんな高価な武器を持つているやつなんぞ、そこらじゅうにいるわけじゃないだろ？」

アンナは肩をすくめてみせた。

「……、三年で、この国の事情は大きく変わったんだよ。あつという間に銃が市井まで普及して、いまじや、あたしのようなしがない商人だつて銃を手に入れられるのが現状さ。そのノッポにも分かりやすいように教えてやるが まず、このブリガン王国は、王城を擁する内陸の都市ケストナーを中心とする王政国家だ。だが、ここハシタルのほかにも様々な都市が、王への忠誠を誓いながらも自治権を持つ勢力として群立している。政治にしても何にしても、一枚岩とはいかない現状がある。だから王都ケストナーは、各都市を束ねるのに、科学院を利用しているんだ。あれは科学という技術の探究と普及がその目的と謳っているけれど、そんなのは建前さ。科学院は王国直属の機関だ。裏じや、国王の勅命のもとでなにから工作を行つてるんじやないかつて噂だよ。自分の手下の組織を食い込ませることで、都市を実質的な支配下に置こうっていう国王の狙いがあるんだ。科学院は、5、6年であつとここの間にほとんどの

都市に支部を建てちまつた。んで、そんな動きに対抗するためか、各地で銃や火薬の密造、密売が横行するようになつた。科学院に頼らない武力を欲しがつたんだろうよ。誰がそうしているかは、商人である私からは言えないがね。そういう経緯があつて、あつという間に裏の経路で銃の市場が充実してきた。いまじゃ、あたしのようないしがない商人だつて手に入れられるのが現状さ」

そういうつてアンナは、ローブの袖に手を突つ込んで、にぶく黒い光を放つ筒状のものを取りだした。銃だ。隠し持つて携帯するのに便利な短身のものだ。

バルハリクはしばらくの間、彼女の持つ銃をじつと睨みつけていたが、しぶい顔で腕を組み、口を開く。

「おまえの言い分は、よくわかつたよ。そういうことなら、人材を斡旋した俺にも責任がある。俺の紹介料を半分に減らすかわりに、こいつの報酬は減らさないつてことでどうだ?」

「おやつさん……！」

マーカスは驚いてバルハリクを見た。

アンナは何もかも見透かしたよつた緑の瞳で、目の前の禿頭の男を見据えた。

「なんでそこまでするんだい」

バルハリクもアンナをまっすぐに見かえす。踏ん反り返つて、への字口をつくつた。

「俺がマーカスの腕を買つてるからだ」

アンナは肩をすくめると、銃をしまいながら言った。

「いいよ……そこまで言つんなら、おやつさんの紹介料が半分で1500、こいつの報酬が3分の2つでことで、4500。これで手を打とつじやないか」

マーカスは彼女を睨みつけていたが、バルハリクはゆつくりとらずいた。

アンナが荷の中身を確認するというので、ふたりは倉庫の外に出た。扉の前に並んで立ち、待つことにした。

バルハリクはしばらく険しい顔で黙り込んでいたが、やがて口を開いた。

「……すまんな。約束より報酬が減っちゃった」

「謝らないでくれよ。三分の一なら4 *gaya*だ。相場の一倍だ。十分

れ」

マーカスは苦笑した。彼にも察しがついていた。仕事をバカにされたからと黙つて、腹が立つてムキになつた自分がバカなのだ。

銃と火薬が彼女のいつほど市井に流通しているのなら、事情に疎いよそ者はハナから雇えない。アンナが銃を持っていることが特殊だと考へるべきだ。彼女はわざわざ用意してきたのだろう。

親しい取り引き相手の紹介は断れないでの、策をしかけて都合よく報酬を値切つた、といったところだ。それで交渉の場にいる全員の顔は立ち、仕事上での関係も保てる。

しかし、自分の故郷や知己のものを貶めてまで金の得を取ろうとしたり、銃というお上の兵器を平然と袖の下から取り出してみせたり、アンナという商人はただ者ではない。マーカスは宙を睨みながら思つた。

マーカスが思索に陥る傍で、バルハリクは、おもむろに袋をまさぐ

かたわら

りはじめた。金貨を2枚取りだし、マークスに突き出した。

「ほら、値切られた分の2gpdだ。これでもとの額になるだろ？」「なんだそりや、なんでおやつさんが払うんだ。受け取れねえよ」

「いいからとつとけ！ このバルハリク様からの饗別だ！」

強引に押しつけられ、つき合いの長いマークスでも断り切れなかつた。

「2gpd程度じゃ新しい鎧も買えないだろ？が、酒でも博打でもなんでも好きに使え。そのかわり、もしものことがないよう、アンナのことをくれぐれも護つてやつてくれよ」

マークスは訝しげな表情を浮かべた。

「えげつない値切られ方をした割に、やけにあの女に義理立てるじゃねえか。おやつさんなんか紹介料が半分だぞ」

「……俺にとっちゃ、娘みたいなもんだからな」

「娘だあ？」

「あいつも”人魚の家”で育つたんだ」「なんだと！？」

マークスは心底驚いた。

”人魚の家”はマークスがいた孤児院の名だ。アンナの顔は知らないうから、マークスが抜けてから入ったのだろう。

「あの子は頭のいいしっかり者だが、なんだかずるけたところもあつてな。商人に向いてると思って、商会に入れるように世話してやつたのさ。今じゃ、あの通り立派にやつてるよ」

「へえ……」

マークスは妙に納得してしまった。バルハリクにとつては、アンナが娘で自分は息子。兄妹のように思っているに違いない。彼のことだから、お互い助け合えるような関係を計らおうと思つたのだろう。アンナもそういうおせつかいを見抜いて、足元を見たのだ。なるほ

ど、やせつしたたかな女とこうわけだ。

だが、マーカスはおやつせんのやつこうつところが嫌いになれなかつた。アンナのやつてこる」とも否定するつもりはなかつたが。

荷の確認が終わったようで、倉庫の扉が開く。アンナは一人を倉庫に招き入れた。

荷車に積まれていた木箱は、アンナが用意した馬車に載せ変えてあつた。その車輪には螺旋状に折り曲げられた針金が取り付けられ、これが伸縮することで振動を和らげる仕組みになっていた。マークスはリイズ国にいたときにも、こんな仕掛けのほどこされた馬車を見たことがあった。

「たしかに確認させてもらつたよ。どれもいい品だね」「ね

「あたぼうよ」

バルハリクはアンナから金の入つた袋を受けとつた。

「これで全部の交渉は完了だね。さて マーカス、早速で悪いが、発つ準備をして欲しい。今日中にはハシタアルを出るよ」

マーカスは肩をすくめる。

「構いませんよ。依頼主様の言つ通りにいたしますぜ」

バルハリクとはここで別れることになった。彼は一人に陽気な笑顔で別れを告げると、荷車を曳きながらゆっくり去つていった。二人はバルハリクのうしろ姿が曲がり角へ消えるのを見届けると、馬車に乗りこんだ。

「悪いけど、あんたは荷台に乗つておくれ」

マーカスは「へいへい」と無愛想に返事すると、荷台の空いたスペースに腰かけた。

アンナは御者席に座ると鞭を振る。

馬車は倉庫の密集する地区から大通りへ出て、城門へ向かう。車輪の仕掛けのおかげで、馬車の乗り心地は快適だった。船酔いが抜けきっていないマークスにとってはありがたかった。

門前にたどり着くと、昼間なので門は開かれており、その前に銃兵たちが横並びに立っていた。

アンナは馬車を降りると、門脇の詰め所に向かった。

荷が怪しいだけに、ハシタアルを出ないうちに旅が終わってしまったのではとマークスは心配したが、そんなこともないようだった。

馬車に乗つて待つていたマークスは、詰め所から和氣あいあいと話す声を聞いた。

詰め所から出てきたアンナは、銃兵と一言、三言」とばを交わしてから、馬車に乗りこんだ。並んで立っていた銃兵たちが素早く脇へのき、馬車は走り出して、ハシタアル門をくぐった。

街の外にでた瞬間、マークスは頬に風が当たるのを感じた。一気に広がった景色を、思わず見渡す。

草原が風になびき、深緑のさざ波を立てていた。その緑の海を彼方まで分つように、馬車の走る街道が続いている。

「なあ、アンナさんよ」

「アンナでいい」

「んじや、アンナ。確かに、目的地は王都のケストナーとかいう都市

だつたよな

「そうぞ」

「何日くらいでつくんだい？」

「2日くらいだね。途中、山脈を超える道のりだよ。今日中に麓の村に着かなきやならない。そこで宿を取る予定だ」

マークスは西の空をみた。巨大な半円形の夕陽が、波立つ草原に沈んでいく最中だ。正面を向けば、少しずつではあるが、峻険な山々の陵郭が地平線から顔を出しつつあつた。

「間に合つのか」

「こいつらはロバと馬の合いの子の羅馬つて動物だけど、馬ほど速くないがそれなりに速く長く走れる。今日中には着くぞー。」アンナは語尾を強めながら、ならんだ羅馬の尻にムチを入れる。一頭はいななき、加速した。

白狼、古きもの

馬車の進むスピードは上がったが、なかなか山脈の麓へはつかなかつた。その間にみるみる日は落ち、東の空は不吉な群青色に染まつていく。

マークスはボーッと沈みゆく夕陽を見送りながら、だるさうに言つた。

「……間に合うのかい？」アンナ

彼女は振り返り、肩越しにマークスを見る。

「……思つたより荷物が重い。いい品だつて証拠だけど、裏目に出たね。日没までに間に合わないね、こりやあ。運が悪いと、厄介な目に遭うよ」

「どうこうことだ」

マークスもアンナを見る。二人は顔を見合せた。

沈黙が訪れ、馬車を曳くラバの蹄音と息遣いが大きくなつた。

それに混じつて、腹の底が冷えるような咆哮が風に乗つて響き渡つた。

マークスはぎょつとして周囲を見渡す。

「マークス、あんたは荷をたのむよ。」

アンナは今までより激しくムチを振るつた。ムチの乾いた音と羅馬のいななきがやかましい。そこに先よりも大きい咆哮が混じる。

マークスはどの方角から咆哮が聞こえるのか突き止めた。東からだ。

薄暗い方に向かって目を凝らす。群青に染まつた空の下。小高い丘から、白い影がいくつも現れ出ていた。それらの影は同時に斜面を下り、こちらへ近づいてきた。

「白狼か……」

目を凝らしたマークスはその正体を見極めた。

「あのクソ忌々しい獣どもを知ってるのか。あいつらはただの狼じやないよ」

「ああ、リイズにいた頃、一度だけ出くわしたことがある。霧深い、不吉な荒野でね。あれは忘れられない夜や……」

白狼は神話時代にこの世界へやつてきた、狼とは全く別の動物だ。火を恐れず、人を食い、ためらわずに共食いをする。全く自然の摺理に反し、数は少ないが、旅人からは恐れられ、忌み嫌われていた。旅の護衛を仕事にする傭兵なら、無縁ではいられない存在だった。

マークスはゆっくりと腰を上げた。

「こいつは、腕の見せどりうつしたことだな」

育闇に支配された東の方角、馬車の右手から、白狼の群れが迫つてくる。さつと数えて二十頭ほど。群れ 자체が生きてうごめく白い塊になり、またたく間に、一頭一頭の残忍に光る目が確認できるくらいに距離が縮まっていた。

マークスも瞳をしづかに光らせ、剣を抜く。

そのうち一頭が、^{二けつ}のよつに塊から抜け出て、距離を詰めてきた。

マークスは腰を落とし、右下段に剣をかまえた。

白狼はみ「」とな跳躍で、馬車の荷台で剣をかまえるマークスに踊りかかつた。

マークスは左上段へ振り上げる軌道で、その白狼を叩き斬った。

胸部と下顎を裂かれた白狼は一太刀で絶命した。地面に落ちて勢いよく弾み、転がる。三頭の白狼が、血塗られた毛皮のかたまりと化した仲間に群がり、その肉を食りはじめた。

残りの16頭は塊を崩さずに、馬車を追いかけてくる。

マークスは背負い袋から麻布を引っぱりだし、刃についた血と身体についた返り血を拭つた。内心で舌打ちした。

やはり、数が多くすぎるか。

白狼の共食いする習性を利用して足止めを考えた。だが一頭に対して関心を示すのがあれだけの頭数だと、少なくとも四頭は斬り殺さなくてはいけない。

斬れば斬るほど、集中力も剣の切れ味も落ちる。この状況を無事に切り抜けられるだらうか。マークスの胸に不安がよぎつた。

「マークス、ちょっとといいかい

呼ばれて振り向く。アンナは肩ごしに何かを投げてよこした。マークスはあわててそれを受けとつた。手にとつたそれを見る。

「これは……」

「爆弾さ」

「バクダン……？」

「銃と同じ、火薬を利用した武器だ。一回きりしか使えないが、固

「ほいほい、まつたやつらをまとめて仕留めるにはいこよ」

それは片手で握れる大きさの、麻布でくるまれた球体だった。そこから一本の紐が伸びている。

その紐を伝つて火花が、球体へ向かつていいく最中だった。

「おい、これもう火が点いてるぞ！」

「火が玉までいつたら爆発する」

「はあ！？」

「タイミングを合わせて投げな」

マークスは自分の握つている爆弾と白狼の群れを交互に見た。

その間にも火は紐を伝つ。球体にあと少しのところまで達していた。

マークスはあわてて白狼の群れに向かつて爆弾を投げた。爆弾は白い塊の中心に落ちた。

次の瞬間、音が破裂した。一瞬で土煙が上がり、衝撃波がマークスの金髪を撫でつける。巻き込まれた五、六頭の白狼が吹き飛んだ。たじろいで身を低めたマークスの頭上を、獣の身体が弧を描きながら飛んでいった。そのまましゃりと地面に落ちる。

マークスは引きつった表情で遠ざかる土煙を見送る。残りの白狼たちは仲間の死体に群がりはじめていた。もはや馬車を追つてくる獣は一頭もいなかった。

「いやつたー！」

アンナは腕を振りまわして叫んだ。

「科学万歳！ ザザあ見れー！ ゾゾものば、ビビビと滅ぼされていくがいいさ！」

マークスは爆発の衝撃でまだ顔をじわばりせつて、彼女の言葉に胸が痛むのを感じた。

（古きもの、か……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4340y/>

とある傭兵と商人の顛末

2011年11月21日16時31分発行